

天藤 真 4
推理小説全集

TENDOU SHIN COLLECTION

鈍、球音

BASEBALL RHAPSODY

検 印
廃 止

著者紹介 1915年東京に生まれる。東京大学国文科卒業。同盟通信記者を経て、千葉県で開拓農民となる。1962年〈宝石〉誌に「親友記」を応募し佳作入選。1979年『大誘拐』で日本推理作家協会賞を受賞。1983年死去。

天藤真推理小説全集 4
鈍い球音

1995年 6月16日 初版

著 者 ^{てん}天 ^{どう}藤 ^{しん}真

発行所 (株) 東京創元社

代表者 平 松 一 郎

(162) 東京都新宿区新小川町 1—5

電 話 03・3268・8231—営業部

03・3268・8204—編集部

振 替 00 160—9—1565

工友会印刷・本 間 製 本

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社までご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

©遠藤歌子 1971 Printed in Japan

ISBN4-488-40804-4 C0193

天藤真推理小説全集 4

鈍い球音

天藤 真

日本シリーズを目前に控えた東京ヒーローズの桂監督が、東京タワーで不可解な失踪を遂げた。にわかに白熱化する大阪ダイヤとの日本シリーズ。しかもその真只中、今度は東京ヒーローズの代理監督が蒸発してしまった……!? 事件の陰に潜む黒い陰謀を暴こうと奔走する新聞記者や監督の娘比奈子の眼前に、やがて全野球ファンを熱狂の渦に巻き込んだ壮絶な戦いを操ろうとする巨大な魔の手の存在が明らかになる……。本書は、不可能興味の横溢する事件をユーモラスな筆致で描いた、野球ミステリの傑作である。

登場人物

- 桂周平……………東京ヒーローズ監督
桂比奈子……………監督のひとり娘
桂正夫……………監督の三弟
藤沢奈々子……………監督の愛人
藤沢俊二……………比奈子の夫
立花……………東京ヒーローズのピッチングコーチ
竹山……………東京ヒーローズのヘッドコーチ
高垣……………東京ヒーローズ代表
津田……………東京ヒーローズのオーナー
笹村……………大阪ダイヤの監督
九鬼……………大阪ダイヤのオーナー
林弘太郎……………プロ野球評論界の大ボス
吉本……………東日新聞のボス
矢田貝今日太郎……………東日新聞記者
西康平……………東日新聞記者
井川芳子……………東日新聞記者
姉小路公一……………東日新聞記者

天藤真推理小説全集 4

鈍 い 球 音

天 藤 真



BASEBALL RHAPSODY

by

Shin Tendou

1971

目次

第一章	消えた巨軀	九
第二章	身内を洗え	四三
第三章	シリーズ開幕	六六
第四章	誘拐	二七
第五章	脱け殻	一四二
第六章	連勝	一七三
第七章	黒い噂	二〇六
終章	監禁・優勝	二四四

解説

倉知淳

三三〇

天藤真推理小説全集 4

鈍い球音

第一章 消えた巨軀

1

十月二十四日木曜日の夜八時近く。

芝公園東京タワービルまえの広場に一台のフォルツクスワーゲン^{かぶとむし}がとまり、三人の男女が下りた。

運転していたのはすらりとした長身の青年で、プロ球団『東京ヒーローズ』の若いピッチングコーチ立花^{たちばな}。日やけして引き締った容貌のどこかに稚^{おきな}げのようなものを残している。きちんとした背広姿である。

後部席から出て来たのは、よくこんな大きなのが詰まっていたものだと感心するほどの巨軀の持主、『東京』球団の監督桂^{かつら}で、万年リーグのどんじりだったチームを、ことし『大阪ダイヤ』から投じて早々に一躍リーグ優勝に導いた話題の人物である。タカのような鋭い眼光とぴんとはねあがった虎ひげが有名だが、このときは頭に海老茶のベレーを乗せ、大きな白い

マスクで顔の下半分をすっぽり隠している。

一番あとから降りたのが桂監督のひとり娘、比奈子^{ひなこ}。真赤なセーターにジーパンという性別不明のスタイル。スタイルだけでなく、動作やことば遣いも男の子そのもので、球団関係者のあいだではひそかに「ふう子」あるいは「ふうちゃん」という芳しからぬアダ名を奉られている。

ペナントレース大詰めの激しい星争いで、ほとんど一カ月、父娘ふたりと婆やだけの自宅に立ち寄るひまがなかった桂監督が、日本シリーズの開幕を二日後にひかえたきょう、やつと一晩だけ家で休養をとることになり、立花の車で送らせる途中、タワーでひとに会う約束があるといい、寄りみちをしたのである。

マスクはむろん人目をさける用心で、彼と彼の虎ひげはこのところテレビや新聞でスポーツファン以外の人々にもすっかり知れ渡っていたから、素顔のままでは十歩と歩かないうちにたちまち人波にとり巻かれてしまうのはまず間違いがなかった。

「では」と桂監督は二人を顧みていった。

「三十分したら戻るから、そのへんでぶらぶらしていてくれ。今夜ここで人に会うことは極秘にしておいてもらいたい。むろん、きみらにもこの会見はオフリミットだ。うっかりあとなんかつけるんじゃない。絶対^{いっぴ}にだぞ」

おわりの一語にはひどく力がこもっていた。立花は緊張して「はい」と答えたが、比奈子は

小鼻をぴくりとさせただけで返事もしなかった。そして、桂監督の後姿がタワービル正面の階段を上がりかけたとき、夜のタワーを見上げていた立花の腕をぐいと引っ張った。

「なにポケットとしてるんだい。見えなくなっちまうぜ」

「えッ？ 監督はついて来てはいけないといわれたんですよ」

「だからだよ」

「だから？」

「来いといわれたら行きやしないよ。来るなっていうから行くんじゃないか」

立花はこの論理を少考し、断固として比奈子の手を外した。

「ではおひとりどうぞ。ぼくは指示どおりここに残っていますから」

「そんなこといいいいのかい」

比奈子の目が憎々しげに燃えた。

「きみにはおれを保護する責任があるんだぜ。おれが迷子になったり、痴漢につかまって強姦でもされたらどうするつもりなんだ。それでもいいってんなら残ってるよ。ワン公みたいにお手々をついて、おとなしくさ」

立花は比奈子がぶいと背を向けてタワービルへ向かうのを二秒ほど見送り、気をかえて、急いで車のキイをポケットに納め、追いついて肩をならべた。痴漢はともかく、このやんちゃな十八娘がいやがらせに自分で迷子になる危険性はないでもなく、も一ついえば彼にもボスの秘

密の相手に対する好奇心が絶無とはいえなかったからである。

「わかりましたよ。そのかわり、無理はしないで、みつきりそうになったら潔く退却するんですよ。それともうひとつ」

「……」

「ひとが聞いてるところでは、おれはやめてください。ぼくまでへんな目で見られますからね」

このどきくさ紛れの忠告が比奈子の耳に入ったかどうかは疑問だった。桂監督の巨軀はもうビルの中に隠れていて、彼女は小走りに走り出していたからだ。

一足遅れて階段をのぼり、比奈子のうしろから監督が曲つていった左手のほうへ目を走らせると、例のベレーが人波の上を動いて行くのがちらりと見えた。ビルの中は存外の広さでちよつとしたデパート並みである。

「どこへ行くんでしょうね」

肩のあたりにゆれているもじやもじやした茶色の髪にささやくと、また憎そうな答えが返った。

「わかつてるじゃないか。食堂やなんかで会うんならわざわざタワーに来やしない。展望台だよ」

「ですかね。上がり口はどこなんだろう。お嬢さん、前に来たことあるんですか」

「あるもんか。田舎っぺえじゃあるまいし。パパが行ったほうに行けばわかるだろ」

そういえば、立花も東京の人間だが、タワーに来たのははじめてだった。そして展望台への上がり口も、たしかに監督の行った方向……正面入口からちようどビルを半周した裏正面の位置にあった。

エレベーターのドアが二つ並び、右側に二人の女子従業員がせまい入口の両側に立って客の整理をしている。二十人ほどの一団が黒いかたまりになって順番を待っている。果して、そのまん中へんにベレーをかぶり、白い大きいマスクの桂の頭だけ抜け出ている。その特色のある姿は見間違えようがない。

「いったとおりでろ」

比奈子は自慢して、自分は柱のかげに身を隠すと、あごでいった。

「入場券買つといでよ。それぐらい持つてるんだろ」

「持つてはいますけどね」

立花はためらった。入場券売場はエレベーターのすぐ左手にあつて、監督の白いマスクはちようどそのほうを向いているのだ。目と鼻とはいわれないが、両手をひろげたほどの至近距離だ。

「見つかつちやいますよ。監督が乗つてからにしましょう」

「そんなこと言つてたら間に合わないよ」

「だって、まさか同じエレベーターに乗るんじゃないでしょう」

「次の間に合わないっていうんだよ。一台の定員は決ってるんだから」
なるほど待っている列は、そう言っているあいだも刻々と長くなつて行く。

「早くしなよ」比奈子はいらいらしている。

「野球が商売なんだろ。盗塁はお手のもんじゃないか」

「あいにくぼくはピッチャー専門なんですよ。それにもし見つかったらどういふんです。なんとなく上りたくなつたじゃすみませんからね」

結果は辛うじて間に合った。ひとつにはエレベーターの設計者がぎゅう詰め状態を定員としておいてくれたおかげかも知れない。立花と比奈子は抱き合つたようなかたちで隅に押しこまれ、首だけを両側の窓へねじまげるのがやつとだった。しかし、なんとか監督が上つていった次のエレベーターに乗りこむことはできたのだ。

「さて、これからですね」

ほつとすると同時に、立花の中にもこの冒険に対する猛然とした興味がわいて来た。

桂監督が娘や腹心のコーチの彼にも秘密にしているデートの相手はだれだろう？ 折りは満天下の野球ファンの注目を引きつけている日本シリーズの直前なのだ。

野球関係者……以外にはありそうもなかった。しかし一々考えて行くと、その中には居そうもないのである。球団関係者、ジャーナリスト、評論家。そのどれもこつそりタワーで会わねばならぬ人間がいるとは思えない。相手球団へのスパイ？ 球団とは別に桂が個人的な情報網

をもっているとは聞いたこともないし、必要もないはずだ。

とすると、全く個人的な知人だろうか。ひよつとしたら秘密の愛人？

まさか、と思う。桂夫人は十年余のむかし世を去ったそうで、立花も写真でしかおもかけ梯を見たことがない。以後独身を通してきた桂だから、愛人の一人二人居てもふしぎではないが、それなら娘や部下をわざわざ現場まで連れてくるわけがない。

エレベーターはビルを抜け出し、突然左右の窓に広い闇がひろがった。

鉄骨が淡くオレンジ色に光りながら、次々に窓をかすめるようにして下へ落ちて行く。

へこの追跡の便利な点は……ぐんぐん足もとから遠のいて行く下界の灯を眺めながら、立花は考える。

へエレベーター以外に上り下りの方法がないことだ。上がっていったものは必ず上にいる。このまま宇宙空間へとび出しちゃうわけに行かないんだからな

展望台まで約一分間。途中すれちがいになり下りてくるエレベーターはなかった。

下りてみると、ここも案外の広さだった。総ガラスの窓を外縁に歩廊が円形にぐるりと回っていて、内側には売店がならんでいる。客の数も多い。

「二手に分れようよ」

近くに桂がいないのを見てとると、比奈子がいった。

「そのほうが早いし、向こうからみつかる率も少ないもん」